

韓国の高等学校「日本語Ⅰ」における活動中心のカリキュラムデザイン —ジョン・デューイの『経験と教育』を参考に—

YOON JIHYE

(教員研修生)

1 研究の背景

本研究は韓国の日本語教育における教科書中心のカリキュラムに対する問題意識から出発した。予め強調しておきたいのは、主に教科書を中心に展開されていくような授業方式に対する疑問であり、教科書を否定するわけではない。教科書は国で定める教育の方針がうまく反映されている教材であり、適切な形で授業に活用するべきである。しかし、すべての教育活動が教科書を中心として展開されていくなら、日本語教育では様々な問題が発生する恐れがある。

日本語授業における教科書中心のカリキュラムの最も大きな問題は主に語学中心の授業に偏りがちな点にある。単元展開過程も「聞く」「話す」「読む」「書く」といった言語の四技能の順になっており、最後に文化項目がある。つまり、文化項目は一つの単元の中でわずか1割にすぎない。このため、何の疑いもなく教科書の通りに授業を展開していくと、語学中心の授業になってしまう。

外国語授業における語学力の伸長は言うまでもなく重要な目標である。しかし、真の意味のコミュニケーション能力というのは、相手側の文化に対する理解なしに達成することは難しい。このように言語と文化間の密接な関係を考慮すると、現在の日本語教科書の文化項目はより丁寧に扱われる必要がある。教育現場の教師がすぐさま教科書の制作にかかわることは無理があるので、日々の授業でのカリキュラムに工夫を加えていきたい。

韓国の日本語教育現場での難点を考慮するとカリキュラム改善の必要性はさらに増していく。後に記述するが、韓国では第2外国語教育が活発に行われてきた。国家水準教育課程の中には日本語を含め8言語があり、高等学校のみならず中学校でも「生活外国語」という科目が設定されている。しかし、選択科目という限界のゆえ、様々な問題を抱えているのも事実である。第2外国語は時代の流れにより影響されやすいため、確固たる位置を確保するためにも、生徒のためのカリキュラムデザインが必要である。

2 研究の目的と方法

教科書中心とは主に「日本語『を』教える」ことに重点が置かれている。ここでは、日本語自体が目的になり、その必要性を感じない生徒は授業を受ける意味を持たなくなる恐れがある。一方、活動中心とは主に「日本語『で』教える」ことに重点が置かれている。すると、日本語は何かの目的を達成するための手段となる。その目的を達成することができると、日本語を学ぶ必要性を感じ

ない生徒もその意味を理解することが期待される。また、日本語「で」何ができるようになるかを考えてこそ、生徒それぞれの興味や能力を考慮した活動を考案することができる。以上のことを踏まえ、本研究の目的は日本語「で」教えるための活動中心のカリキュラムデザインに取り組むことである。

研究の方法は次の三つのようである。

第一に、理論的背景を検討する。まず、教科書の文化項目に焦点を当てるために、教科書の文化項目の分析に関する先行研究を検討する。次に、活動中心のカリキュラムデザインの理論的背景として、ジョン・デューイの『経験と教育』を検討する。

第二に、韓国の「国家水準教育課程」¹を検討する。活動を選別するための明確な基準として分析を行う。また、教科書中心から方向を変えるためには、さらに教科書の分析が重要なので、「日本語Ⅰ」²教科書の文化項目を分析する。様々な教科書を検討することにより、文化項目の全体像を把握することができる。

第三に、韓国の高等学校「日本語Ⅰ」における年間カリキュラムを開発する。理論的背景と国家水準教育課程の検討結果に基づき、これまでの実践を踏まえ、活動中心のカリキュラムデザインに取り組んでいきたい。

3 理論的背景の検討

3.1 先行研究の検討

まず、キム・ソンチャン(2003)は、言語と文化の関係を明らかにした。「言語は文化的現象の投影であり反映である。言語を通して文化を習得し、また文化を通して言語を習得することになる。」と述べた。また、「外国語学習の究極的な目標は、外国の文化に対する理解とその文化圏の構成員との交流を図り、こうした体験を通じて学習者自身が国際化されることにある。」と述べながら、「言語の四技能の正確な習得を強調した従来の教育での語学能力の育成だけでは、外国語教育の究極的な目標を達成することができない。文化理解のための文化教育が必要になる。」と指摘した。

一方、キム・ソンヒョン(2006)は、「初級日本語教科書の文化語」³で定義された「文化語」という言葉を提示した。言語が文化の一部であり、その社会の文化的特徴をより鮮明に映している言葉を「文化語」という。「時間や駆使できる範囲、日本に関する予備知識などにおいて多方面で制約がある初級段階の日本語授業におけるキーワードの必要性は大きい。」と述べている。

両論文とも言語と文化の密接な関係が丁寧に記述されており、様々な観点から教科書の文化項目の分析が行われている。しかし、あくまでも教科書中心のカリキュラムにおける文化教育を前提にしており、その分析結果が教育現場でいかに活かされるべきかの方向性は明確に出されていない。

本研究では教科書の文化項目を分析した後、これらが活動中心のカリキュラムでいかに組織されていくかについて、一つの方向を提案したい。

3.2 ジョン・デューイの『経験と教育』の検討

活動中心のカリキュラムをデザインするということは学習者の経験を選別し、組織する過程である。経験を選別するにあたって、「経験と教育の関係」について追究するためにジョン・デューイの『経験と教育』⁴を検討した。

デューイは「経験」とは何か、注意を喚起しながら「教育」との関係についても明らかにした。すべての経験が教育的ではなく、教育的ではない経験はいくらでもありと強調した。つまり、生徒の経験を選別するにおいても、何でも体験させれば済むわけにはいかない。

また、経験の「質」の二つの側面も提示した。経験そのものの側面とその経験がもたらす効果という側面があるという。前者は明確なことで容易に判断されうるが、後者は経験の表面には現れ出ない。これまでの実践を考えてみれば、経験の一つの側面しか考慮していなかった。「興味」という明確な側面だけではなく、その経験がもたらす効果の側面も入念に入れておく必要がある。

では、経験が教育的なものになるためにはどうすればよいのか。デューイは次のような二つの原理を提示している。一つ目は経験の「連続性」の原理で、以前の経験が連続して未来により望ましい経験をもたらすという原理である。二つ目は経験の「相互作用」の原理で、経験における「内的条件」と「外的条件」が相互作用するという原理である。ここで、「内的条件」とは個人的な要求、願望、目的、能力などの主観的条件で、「外的条件」とは教師の言葉や書物など、個人の環境を構成する客観的条件である。以上の経験の二つの原理をまとめると次の図1のようである。

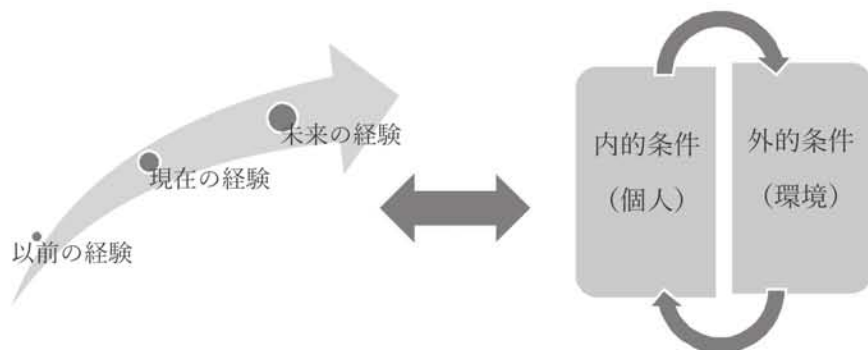


図1 左：経験の連続性の原理，右：経験の相互作用の原理
(ジョン・デューイ, 2004, pp.46-68 をもとに筆者が整理)

中央の矢印(⇔)は「連続性」と「相互作用」の原理が相互に分離しているものではなく、離れていても結びつくものであるということを意味する。要するに、「連続性」と「相互作用」の原理が結びついてこそ教育的な経験が生まれるということである。この経験の二つの原理はカリキュラムデザインに対する筆者の考え方にも有意義な示唆を与えてくれた。当初、月別の独立した活動を選別してカリキュラムに入れるつもりであった。しかし、ジョン・デューイの本を読むことによって、3月の活動が4月の活動に連続するような活動間の連続性を考慮するようになってきた。

ジョン・デューイは第三章の末尾で「人生に成熟した人こそ未来に対し有形で好ましい影響を与えるような種類の現在の経験のための条件を制度化する責任が負われているのである。成長あるいは成熟としての教育は、常に現在の過程でなければならない。」⁵と述べながら、学習者の現在の経験を組織する教育者の責任を強調している。このような訴えに応えられるよう、経験の二つの原理を常に入念しながら、活動中心のカリキュラムデザインに取り組んでいきたい。

4 韓国の国家水準教育課程及び教科書の検討

4.1 第2外国語科教育課程の変遷

韓国では約40年前に第2外国語としての日本語教育が始まった。1965年に韓国と日本の国交が正常化された。1973年に日本語を高等学校教育課程に第2外国語として設定するという告示がされた後、第3次教育課程⁶から適用された。また、1998年からは日本の大衆文化が段階的に開放され始めた。それ以降、日本語教育に対する需要が急増し、人気科目として浮上した。第7次教育課程では中学校教育課程に「生活外国語」が設置された。2018年2月現在、高等学校教育課程には日本語、中国語などを含め8言語がある。以上のことをまとめると次の表1の通りである。

表1 韓国の第2外国語教育課程の変遷⁷

教育課程	年度	設定科目	教科領域	備考
第1次	1955-1963	ドイツ語、中国語	外国語	
第2次	1963-1974	+フランス語	"	*1965 国交正常化(韓国・日本)
第3次	1974-1981	+日本語、スペイン語	"	
第6次	1992-1997	+ロシア語	"	
第7次	1997-2007	+アラビア語 +「生活外国語」 (中学校教育課程)	"	*1998-2004 日本の大衆文化の順次開放
2007 改訂	2007-2009		"	
2009 改訂	2009-2015	+ベトナム語	生活・教養	
2015 改訂	2015-現在		"	*2018 年から順次適用 ⁸

上の表1の「教科領域」⁹について説明すると、もともと「外国語」領域であった第2外国語は2009改訂教育課程から「生活・教養」領域に変更された。これまでの言語の四技能を軸とした教科書中心のカリキュラムは主に「外国語」領域で行われてきた。しかし、教科領域が「生活・教養」になってしまい、学校現場では様々な難点に直面している。そこで、筆者の提案する活動中心のカリキュラムが一つの代案になるのではないかと考える。

4.2 高等学校教育課程「日本語Ⅰ」の検討

2015 年 2 月現在、告示された教育課程は 2015 改訂教育課程である。「日本語Ⅰ」は高等学校の教育課程に設定された科目なので、「高等学校教育課程」を検討する。

まず、2015 改訂教育課程総論の「高等学校教育目標」には、「中学校教育の成果に基づき、生徒の適性と素質に合わせ進路を開拓し、世界と疎通する民主市民としての資質を涵養することに重点を置く。」¹⁰と記されている。高等学校の教育目標であるだけに、生徒の進路に力を入れている。「進路を開拓する」という言葉は、後に紹介する活動中心のカリキュラムの重要なキーワードになる。

次に、2015 改訂第 2 外国語科教育課程「日本語Ⅰ」の目標は以下のようなものである。

日常生活に必要な基礎的な日本語の意思疎通能力を育成し、日本人と交流できる能力を育てる。

1. 意思疎通基本表現を理解し、状況に応じて活用する。
2. 日本文化の理解を通して世界市民意識を育てる。
3. 様々な媒体と資料を活用して情報交流能力を育成し、状況に応じて活用する。¹¹

「意思疎通基本表現」¹²とは高等学校で優先的に扱うことを勧めるコミュニケーション上の基本表現である。「日本語Ⅰ」では意思疎通能力の育成に重点を置いている。要するに、「言語的内容」は「基本語彙」¹³や「意思疎通基本表現」を通して学び、「文化的内容」の理解の下に、様々な経験を通して、目的を達成するということになる。その目的は前述の高等学校教育目標で強調した生徒の進路に関することだと考えられる。以上のことを踏まえ、筆者の持っている活動中心のカリキュラムのイメージは次の図 2 のようである。

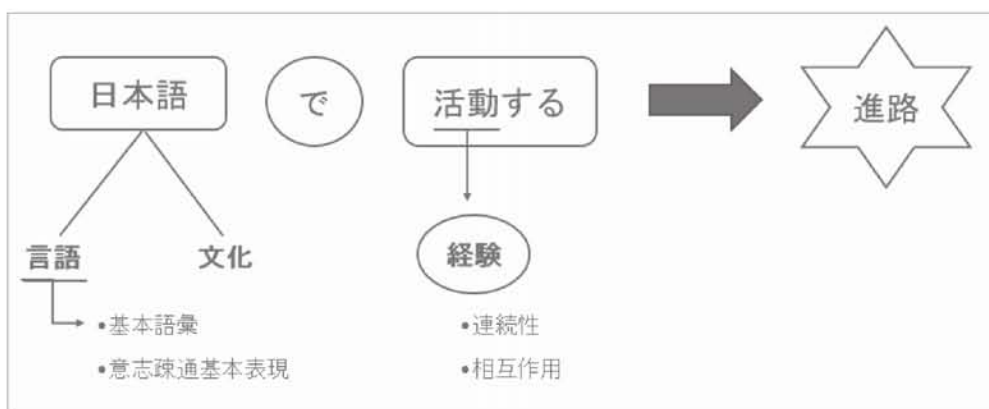


図 2 教育課程に基づいた活動中心のカリキュラムのイメージ

最後に、現行の「日本語Ⅰ」教科書は 2009 改訂時期の教育課程に基づいているので、2009 改訂第 2 外国語科教育課程「日本語Ⅰ」を検討する。大きく「目標」「成就基準」「教授学習方法」「評価」に分かれている。「成就基準」とは主に教科で教える内容のことで、「言語的内容」と「文化的

内容」に分かれている。その「文化的内容」はさらに「言語行動文化及び非言語行動文化」「日常生活文化」「伝統文化や大衆文化」に分かれている。「文化」はそもそも「言語的内容」の「言語材料」の一つに過ぎなかったが、徐々に重要視されるようになり、「文化的内容」と独立した。¹⁴

このように「成就基準」には「言語的内容」と「文化的内容」が対等に位置している。しかし、教科書の両方の割合は「言語的内容」の方に偏っている。教師はこのような点に入念し、両方のバランスを考慮してカリキュラムを再構成するべきである。新しいカリキュラムでは日本文化を積極的に取り入れるため、「文化的内容」に焦点を当てたい。

4.3 高等学校「日本語Ⅰ」教科書の文化項目の分析

「文化的内容」が各教科書でどのように具体化されているか調べるために「日本語Ⅰ」教科書の文化項目を分析した。2009 改訂教育課程の「日本語Ⅰ」の認定教科書は 7 種類である。そのうち、6 種類の教科書を対象として分析した。¹⁵前述のように三つに分かれている「文化的内容」の中で、主に「日常生活文化」と「伝統文化や大衆文化」について分析を行った。「日常生活文化」は学校生活や食文化、衣服文化などが多く紹介されており、「伝統文化」は祭りや年中行事などの出現頻度が高かった。6 種類の教科書の文化項目をまとめると次の表 2 の通りである。

表 2 「日本語Ⅰ」教科書の文化項目の分析結果

	A	B	C	D	E	F
1	地理と気候, 祭り	伝統衣装	—	住居文化	挨拶文化	挨拶文化, 日本旅行
2	学校生活	挨拶文化	挨拶文化	学校生活	学校生活	訪問礼儀, 日本の名字
3	住居文化, 訪問礼儀	食文化	住居文化	食文化, 訪問礼儀	訪問礼儀, 食文化	世界文化遺産, 伝統遊び
4	部活動	住居文化	学校生活	スポーツ	交通事情	食文化
5	食文化	交通事情	食文化	年中行事, 祭り	年中行事	交通事情, 祭り
6	年中行事	祭り	祭り	プレゼント	世界文化遺産, 祭り	プレゼント, 観光名所
7	交通事情	観光名所	観光名所	交通事情	伝統衣装, 茶道	部活動
8	伝統遊び	学校生活	大衆文化	伝統衣装	防災訓練, 住居文化	希望職業
9	伝統衣装, 祭り	年中行事	自然災害	観光名所	大衆文化	スポーツ, 伝統衣装
10	お正月	大衆文化, 伝統芸能	お正月	年末年始	年末年始	年中行事, お正月

分析の結果、日本語を選択する学習者の興味や関心が高い、漫画やアニメなどの「大衆文化」が扱われている教科書は少なかった。教科書は開発される時期と使われる時期の間に差があるので、最新の大衆文化は積極的に反映されにくいと思われる。したがって、実際のカリキュラムの中に生徒の興味や関心がうまく反映されるように、教育現場の教師が工夫する必要がある。

5 活動中心の年間カリキュラムデザイン

5.1 カリキュラムデザインの二つの構成

では、実際のカリキュラムデザインに取り組みたい。これまで検討してきた理論的背景と韓国の国家水準教育課程の分析結果に基づき、カリキュラムデザインにおける二つの構成を考えた。

第一に、「①日本語で文化体験をする」である。研究の背景で述べたように、これまでの教科書中心のカリキュラムにおいて「文化的内容」の比重は少なかった。国家水準教育課程の文化項目の分析結果に基づき、食文化や衣服文化、伝統遊びなどの体験活動を中心に取り入れたい。

第二に、「②日本語で進路を開拓する」である。研究の目的で述べたように、基本的な考え方は「日本語『で』教える」である。日本語が何かの目的を達成するための手段だと、その目的は何だろうか。前述した高等学校教育課程で最も強調している「生徒の進路」に関することだと考える。そこで、「日本語で進路を開拓する」というカリキュラムを開発することにした。国内での進路のみならず、日本を含め海外にも視野を広げることを期待しながら取り組んだ。

5.2 ①日本語で文化体験をする

まず、3月にはひらがなを学習し、「ひらがな『連想』¹⁶カルタ作り」活動を行う。カルタゲームはひらがなの学習が終わると導入する活動であるが、生徒が直接カルタカードを作ることによって、学習効果が高まることを狙っている。7月には期末試験の後、「浴衣体験」と「川柳大会」¹⁷を行う。夏休み前なので二つの活動を入れている。9月にはカタカナを学習し、「日本国際交流基金ソウル文化センター」¹⁸で主催する「かなコンテスト」¹⁹に参加する。このように、自分のアイデアを視覚化する活動が連続して行われるように設計した。また、学校の中のみならず、地域社会の資源へ視野を広げ、身の回りの世界と相互作用することを期待している。12月には2学期の期末試験が終わった後、「伝統遊び大会」を行う。日本の伝統遊びは韓国ではあまり接する機会がないので、学校教育で体験する意義があると考えた。1月には「たこ焼きパーティー」を行う。食生活に関する文化項目はすべての教科書に載っており、生徒たちの関心も高いので、まとめの活動として取り入れた。日本語のレシピを翻訳するなど、日本語学習の成果も活用できるように工夫した。

5.3 ②日本語で進路を開拓する

まず、4月には「日本語で検索体験」を行う。韓国のコンピュータで日本語の入力方法を学んだ後、日本の検索サイトで自分のキーワードを検索して翻訳する。キーワードは5月の活動に続く自分の夢や趣味に関する単語である。生徒が自ら検索できるようになることを意識して取り入れた。5月の「進路統合プロジェクト」は生徒の進路や趣味と日本(語)を統合させる活動で、報告書と作品を出す。報告書は決まった様式に作成し、作品の形は自由である。例えば、日本の歌を演奏したり、日本のロボット産業についてスライドを作ったりする。生徒の興味や関心は主に日本の大衆文化を中心に広がっているなので、教科書には載っていない生きた日本文化にも触れることができる。

6月には「進路1分スピーチ」を行う。この活動では先の報告書の内容をもとに日本語で1分間の発表を行う。教師は生徒が翻訳した原稿の文法や発音をチェックする。この活動は後のプロジェクトにつながる。10月には「日本GO!プロジェクト」を行う。前のスピーチで共有されたお互いの夢や関心事に基づいてチームを作り、「夢探しの日本旅行」というコンセプトで旅行計画を立てて発表する。この活動は学校で学ぶ日本語が実際どのような場面で必要になるかという悩みから生まれた。生徒たちが将来日本語を必要とする場合は主に仕事や趣味、旅行だろう。まず、5月の進路統合プロジェクトを配置し、前後の活動が有機的に連続するように設計した。また、生徒の欲求や能力を尊重し、個人のテーマを決め、「内的条件」と「外的条件」が相互作用するように工夫した。

5.4 年間を通した活動中心のカリキュラムの完成

「①日本語で文化体験をする」と「②日本語で進路を開拓する」を合わせ、完成した活動中心の年間カリキュラムは次の図3のようである。

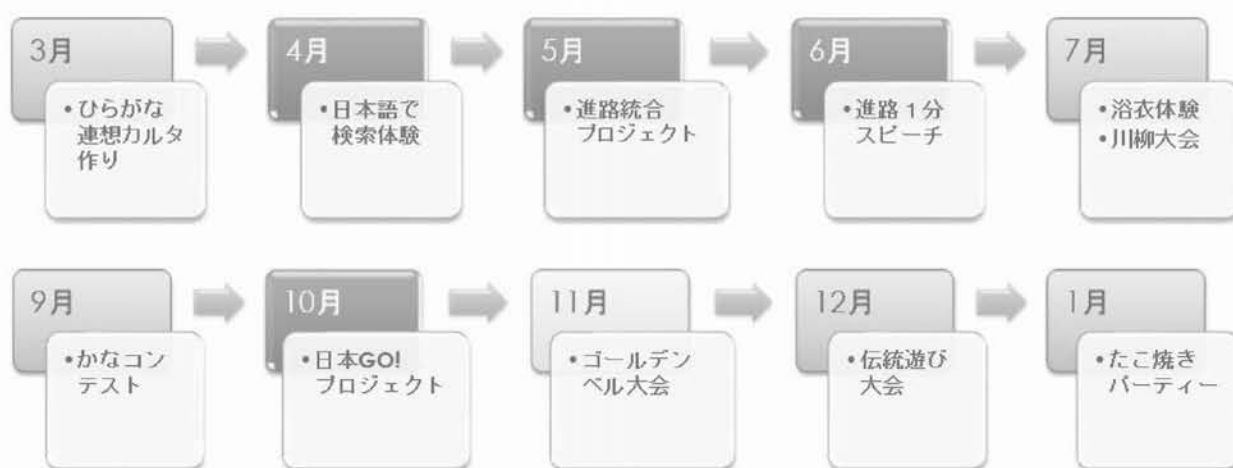


図3 年間を通した活動中心のカリキュラム

①の活動の中で、文字に関する活動は学期の初めに、文化体験活動は生徒たちの集中力が落ちやすい期末試験以降に導入した。また、②の活動は学期中に配置して集中的な学習が行われるように工夫した。このように生徒の欲求やニーズ、学ぶ時期などを考慮することによって、学習効果が高まることを狙っている。

カリキュラムの中のすべての活動計画案を作成した。ここでは例として5月の活動計画案を紹介する。とりわけ、次のページの図4の太線で囲んだように「関連語彙・文型」項目を設定した。単なる活動で終わるのではなく、自然に日本語の学習につながるように工夫した。教育課程に載っている「基本語彙」や「意思疎通基本表現」などの「言語材料」を積極的に使うことにより、活動中

5月	進路統合プロジェクト	授業形態	個人学習
目標	・自分の進路や趣味を日本(語)と統合することができる。		
概要	・自分の進路を日本(語)と関連付けて作品を完成する。 ・報告書(様式)と結果物を提出する。 ・結果物の形式は自由(スライド、動画、レポート、演奏など) ・報告書の感想は6月のスピーチの原稿になる。		
展開計画	・3月：プロジェクトのお知らせ、テーマの選定 ・4月：日本のウェブサイトでキーワードを検索する。 ・5月：報告書と作品を提出する。 ・6月：報告書に書いた内容をもとに日本語で1分間の発表を行う。 ・10月：チームを作り、日本GO!プロジェクトを行う。		
関連資料	 		
関連語彙・文型	・自分の進路や趣味に関する言葉や表現 ・現行の第2外国語科教育課程「日本語Ⅰ」[別表Ⅱ]基本語彙表		
注意事項	・進路が決まっていなくても、自分趣味や関心事と日本(語)を関連付けるように指導する。 ・3月から5月の完成まで生徒個人の進捗状況をチェックする。 ・授業の残りの時間に去年の優秀作品を紹介する。 ・キーワードを日本語で記入する。		
評価	・遂行評価15%(報告書+結果物)		

図 4 5月「進路統合プロジェクト」の活動計画案

5.5 開発したカリキュラムに基づいた評価計画

西岡(2016)はウィギンズらを引用し、「カリキュラム」は「ゴールを達成するために用いられうる最も適切な経験、学習課題、評価方法を特定するもの」と述べた。²⁰最後に評価計画案を紹介する。

韓国では徐々に学習の過程を重要視するようになり、学習の過程を評価する「遂行評価」²¹の重要性が高まっている。筆者の所属している地域では日本語科目の場合、教師の裁量によって筆記試験を減らし、遂行評価の割合を上げることができる。活動中心のカリキュラムでは遂行評価の方が

学期	1学期				
種類	筆記試験	遂行評価(パフォーマンスに基づく評価)			
領域	期末テスト	ひらがな 連想カルタ 作り	進路統合 プロジェクト	進路 1分スピーチ	スタンプ (ポートフォリオ)
割合	40%	15%	15%	15%	15%
時期	6月	4月	5月	6月	3～6月 (随時)

212

7 今後の課題

本研究で考案した新しいカリキュラムの中にはすでに実践した活動もあるが、まだ実践していないものもある。まず、今回開発したカリキュラムを教育現場でいかに実践していくかが、今後の課題だと言える。

また、活動がうまく行われるための最低限の言語的能力は、日々の教科書の授業で少しずつ育てていくことが前提になるだろう。最後に繰り返すが、活動中心のカリキュラムでは言語の四技能を否定するわけではない。ただし、各技能が分離された形ではなく、自然に統合された形で習得できるようになることを狙っている。その方が、生徒たちが経験していく実際の場面にも適用しやすい。

「分裂した世界、部分や側面がそれぞれに結び合わさっていない世界は、それ自体が分裂した人格の兆候であるとともに、分裂の原因である。」²³と述べたデューイの言葉は、各技能が分離された形で行われる外国語教育に照らし合わせても有効なのではないだろうか。

現場で起こりうる様々な難点を乗り越え、本研究がこれからの韓国の日本語教育に少しでもより望ましい未来をもたらすように、頑張って実践していきたい。また、新しく開発したカリキュラムで日本語を学ぶという経験が、生徒たちの将来のための教育的経験になることを願っている。

引用文献

- ジョン・デューイ(2004)『経験と教育』市村尚久訳、講談社。
- 西岡加名恵(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化社。
- 教育科学記述部(2015)「教育部告示第 2015-74 号 [別冊 4] 高等学校教育課程」
- 教育科学記述部(2015)「教育部告示第 2015-74 号 [別冊 16] 第 2 外国語教育課程」
- 教育科学記述部(2011)「教育部告示第 2011-361 号 [別冊 16] 第 2 外国語教育課程」
- 国家教育課程情報センター www.ncic.go.kr (2018 年 2 月 2 日確認)
- 韓国教育課程評価院(2015)「2015 改訂教育課程総論解説書(中・高等学校)開発研究」PDF ファイル
- キム・ソンチャン(2003) 高等学校「日本語 I」教科書の文化の分析, 大田大学学校教育大学院日本語教育専攻修士論文。
- キム・ソンヒョン(2006) 第 7 次教育課程の「日本語 I」教科書の文化内容分析, 明知大学学校教育大学院日本語教育専攻修士論文。
- ユン・ユスック(2012) 国家政策としての日本語の教育課程及び教科書の変遷の分析研究, 韓国外国語大学校一般大学院日語日文学科日本語学専攻博士論文。
- アン・ビョンゴン他 9 人(2014)『高等学校 日本語 I』EDUSEOUL 社。
- イ・キョンス他 4 人(2014)『高等学校 日本語 I』時事日本語社。
- オ・ヒョンジョン他 6 人(2014)『高等学校 日本語 I』MiraeN 社。
- ハン・ミギョン他 3 人(2014)『高等学校 日本語 I』教学社。

ミン・クァンジュン他 5 人(2014)『高等学校 日本語 I』天才教育社。

ユン・カング他 3 人(2014)『高等学校 日本語 I』多楽園社。

本論文は、京都教育大学(2018)『教員研修留学生研究報告書 No.25』に載せた筆者の原稿を加筆修正したものである。

注

¹ 日本の学習指導要領に当たる。

² 日本語を初めて学ぶ学習者に基本語彙や文型を理解させ、意思疎通能力を養う科目である。「日本語 I」は「日本語 II」を学習するための基礎的な科目である。

³ 今田滋子、中村妙子(1975)「初級日本語教科書の文化語」『日本語教育 27 号』日本語教育学会

⁴ ジョン・デューイ(2004)『経験と教育』市村尚久訳、講談社。

⁵ 同上書、p.76。

⁶ 1974 年に告示された国家水準教育課程(1974-1981 年)。「日本語」が最初挿入。(1973.2.310 号)

⁷ ユン・ユスック(2012)の整理をもとに筆者が作成。

⁸ 高校 1 年生は 2018 年 3 月 1 日、高校 2 年生は 2019 年 3 月 1 日、高校 3 年生は 2020 年 3 月 1 日から順次に適用される。

⁹ 2018 年 2 月現在、告示された高等学校の 2015 改訂教育課程には四つの教科領域と八つの教科(群)がある。詳細は「基礎領域『国語、数学、英語』『探求領域『社会(歴史/道徳)、科学』『体育・芸術領域『体育、芸術(音楽/美術)』『生活・教養領域『技術・家庭、第 2 外国語、漢文、教養』である。

¹⁰ 2015 改訂教育課程総論の「学校級別教育目標」の「高等学校教育目標」の冒頭を筆者が訳す。

¹¹ 2009 改訂第 2 外国語科教育課程「日本語 I」の「目標」を筆者が訳す。

¹² 2015 改訂第 2 外国語科教育課程「日本語 I」の[別表 I]、pp.325-333。「挨拶」「紹介」「配慮及び態度の伝達」「意思の伝達」「情報要求」「情報提供」「行為要求」「対話の進行」の項目に分かれている。

¹³ 2015 改訂第 2 外国語科教育課程「日本語 I」の[別表 II]に載っている言語材料の一つで 500 個の語彙がある。

¹⁴ 第 7 次外国語科教育課程「日本語 I」には「言語材料」の一つとして「文化」項目がある。その次の 2007 改訂第 2 外国語科教育課程「日本語 I」からは「言語的内容」と「文化的内容」が分離された。

¹⁵ ただし、本研究は学問的な目的で分析したので、分析対象の著者と出版社は明記しないことにする。任意に A, B, C などのようにアルファベット順に表記した。

¹⁶ 心理学用語で、一つの観念が他の観念を呼び起こすことを指し、「観念連合」「連合」ともいう。例えば、「汽車」で「旅行」を思い浮かべるなどの現象である。『高麗大韓国語大辞典』の定義を筆者が訳す。

¹⁷ 日本の定型詩である「俳句」や「川柳」を学んだあと、直接「川柳」を書いてみる活動である。5・7・5 文字のハングルで書くように工夫し、一つ以上は日本語の単語を入れる。内容と関連した絵を描いて完成する。

¹⁸ 日本語や日本文化に関する様々な講座やイベントが開かれる。<http://jpf.or.kr/> (2018 年 2 月 2 日確認)

¹⁹ ひらがな又はカタカナをモチーフとしたグラフィックデザイン <http://jfkanacon.org/> (2018 年 2 月 2 日確認)

²⁰ 西岡加名恵(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化社、pp.10-11。

²¹ 日本のパフォーマンスに基づく評価に当たる。

²² 筆者の勤務校の様式に沿って作成したもので、学校によって異なる。

²³ ジョン・デューイ(2004)『経験と教育』市村尚久訳、講談社、p.65。